

第 121 回学術総会について考える

—これからの精神科医に求めること—

| 上野 修一 Shuichi Ueno

2025年6月19日から21日まで神戸国際会議場・神戸国際展示場・神戸ポートピアホテルで開催される第121回日本精神神経学会学術総会の会長として指名され、準備を開始したところだ。テーマは、「精神神経科学の充実・発展のために取り組むべきこと」とした。このテーマを達成するためには、一人ひとりの学会員が精神科医として輝くことが必要である。そこで、私の考える精神科医像について以下に述べたい。

まず、精神科医は、医師である以上、「教育・研究・臨床」のどの分野にも注意を払う義務があり、どれが欠けてもだめである。医学の発展に尽くしたオスラー博士は、「医学は科学に支えられた技術である。医師は、論文や本に親しみ、自然科学をよく観察し、良き友人をもつことが大切である」と語った。詳細な観察から得られた臨床所見を吟味する。莫大な医学情報を整理し、最大限に活かし治療にあたる。得られた新知見を形にして報告し批判を受ける。彼の言葉は、これら一連の重要性を指していると思われる。精神科医の基本も同じで、「学び」「行い」「伝える」、医師としてのプロフェッショナルリズムは生涯続くはずで、年齢や立場に関係なく、相互学習する態度をもたなければならない。

次に、精神科医としてのアイデンティティ、すべての医療のなかでの精神科医としての立場と、精神科医療のなかでの自分の立ち位置を意識すべきである。医学史において、精神医学は身体医学と成り立ちを異にするが、現在の医学は精神医学部門抜きでは考えられない。コンサルテーション・リエゾン精神医学は、包括的医療を推進する立場から、主に身体疾患と精神障害を併発した患者のケアを行うと定義にあるが、この言葉を持ち出すまでもなく、われわれは、心の専門家として身体診療にかかわるだけの技能をもたなければならない。加えて、災害時などの全人的治

療にも積極的に組みすべきである。そして、これら精神科医としての基盤の上に、自分らしさを積極的にめざし、サブスペシャリティとして造詣の深い専門分野をもつべきである。

最後に、社会のなかで精神科医として行動することである。精神医学は、医学の一部門であるだけでなく、福祉など精神障害患者の日常生活に深く入り込むことが必要な部門である。日常臨床において上記を意識して活動することに加え、こころの専門家として、広く啓発することはもちろん、社会的弱者であり発言力の弱い精神的ハンディキャップをもつ者の代わりとなり、発信を続けなければならない。

当たり前の青臭いことを上から目線でなんだと批判されるかもしれない。自分自身、できているとは思っておらずいまだ成長段階にあるが、これらをめざすことは、難しいことではなく楽しいことである。なぜなら人間は頼られて成長し、それに魅力を感じる生き物だからである。これらに加えてだが、これからの精神科医療の発展には、医療者が一人の人間として輝くことも大事であり、ライフワークバランスに注意を払う必要がある。

上記を目標に総会の運営を考えたが、所属する中国四国地区の若手のメンバーにプログラム委員に加わってもらい、現在の精神科医療に必要な最新情報を提示できるよう依頼している。これまでの当学会の良い流れを遮ることなく、新世代の精神科医の方向性を考えるヒントとなる学術総会としたいと思っている。もちろん、ポストコロナ時代での、オンデマンド配信も行うが、それは一方通行になりがちである。ぜひ、一人でも多くの会員の皆様が神戸に参集し、精神科医療にかかわるどんな問題でも相互に討論できる機会になればと願っている。